

発熱と解熱剤の使い方

一般的に「熱が高い＝大変なことになる＝薬で治療」というイメージがあるのではないのでしょうか。でも、「熱が高い＝薬で治す」がすべて正しいわけではありません。今回は子供の発熱と解熱剤の使い方について。

小児科の教科書には、健常児であれば 39℃未満の発熱に対しては通常治療の必要はないとしています。発熱自身は病気ではなく感染症などに伴う生体反応であり、発熱で脳に障害が出る等の心配もありません。解熱剤の投与は感染症の経過には影響が無く、解熱剤の投与で病気が早く治るというわけでもありません。

では解熱剤はどんな理由で投与されるのでしょうか？発熱は体を震えさせる、皮膚血管を収縮して熱の放散を抑えるなどで起こります。これには体力が必要です。体温が放散しやすい子供が体温を上げるためには多くのエネルギーを消費します。発熱による体力の消耗が過度になると子供はぐったりしてきます。水分や栄養もとれず、不快感も強くなり、発熱によるプラス面（熱を上げて病原体を退治する）よりもマイナス面が大きくなります。こうなると解熱剤の出番となります。投与後 1~2 時間で効果が発現します。熱は平熱まで下げる必要はありません。体力の消耗を防ぐのが目的ですから 1℃でも体温が下がれば有効と考えます。服用は、ぐったりしたときの頓用が原則で、1 日 3 回などと定期的に服用させる必要はなく、39℃あっても機嫌がよければ投与しなくても結構です。内服薬と坐薬ではどちらがよいかと聞かれますが、効き目、効くまでの時間とも剤形による違いはありません。使いやすい方で結構です。

熱は決して悪者ではありません。ご機嫌をみながら上手に熱とつきあいましょう。